

公立幼稚園における未就園児支援に参加する保護者の意識の推移 — 5, 6月期と11月期の比較から —

滝口 圭子¹・吉村 淳美²

Changes in the Attitudes of Parents Following a Child-Rearing Support Program for Children Under 4 Years Old: — Comparison of May and November Questionnaire Findings —

Keiko TAKIGUCHI¹, Atsumi YOSHIMURA²

Abstract: The present study examines the effects of a child-rearing support program on the attitudes of parents of children under 4 years of age at three kindergartens. The parents completed questionnaires at the beginning of the program in May or June and six months later in November. The results showed that the proportion of parents who derived satisfaction from receiving praise for their childcare and the proportion of parents who participated in the support program in order to pursue their own growth were significantly higher in November compared with the beginning of the program. In contrast, the proportion of parents who derived satisfaction from talking with parent staff or kindergarten teachers and the proportion of parents who consulted other parents about childcare outside of the support program significantly decreased in November compared with the beginning of the program. These results suggest that although child-rearing support may initially discourage parents from establishing relationships with other parents, it also helps parents to obtain multifaceted views about their children and to recognize their own personal growth.

Key Words: childcare services, opening preschool to the public, parent attitudes, student volunteers, local related education programs

問題と目的

昨今、保育者の仕事はますます多様化、複雑化を極めていくといえよう。例えば、子育て支援、保護者支援、特別支援教育、早寝早起き朝ごはん運動に代表される生活支援など枚挙に暇がない。そして、今や子育て支援の対象は、在園児や在園児の保護者に限定されない。子どもや子育て家庭を取り巻く環境の変化を受けての保育所・幼稚園に対する期待の高まりと役割の増大を背景に、改訂幼稚園教育要領（文部科学省、2008）と新保育所保育指針（厚生労働省、2008）が平成20（2008）年に告示され、幼稚園・

保育所ともに、就学前の子どもを持つ保護者に対して子育て支援を実施する（宮本・藤崎、2011）ことが、より明確に位置づけられた。要領、指針ともに、地域における子育て支援の内容がより細分化された。また旧指針では、地域における子育て支援の具体的在り方として「一時保育」が最初に掲げられていたが、新指針では「ア 地域の子育ての拠点としての機能」に代わっており、現在の子育て支援は、育児の外注化の推進ではなく、親と子どもがともに育つことを支援するもの（田中・戸田・横川、2011）ととらえられている。

立石・安藤・岩藤・丹羽・金丸・荒牧・掘越・砂上・無藤（2004）は、幼稚園で実施されている子育て支援の実態を把握することを目的と

1 金沢大学人間社会研究域学校教育系

2 愛知県春日井市立白山保育園

し、平成16(2004)年に複数地域の公立・私立及び国立附属幼稚園計112園の園長を対象に質問紙を配付した。立石ら(2004)は、予備調査の結果から、子育て支援には、①預かり保育、②子育て相談、③就園前の親子への支援の3つのプログラムが含まれると提起し、本調査では、各プログラムの実施状況やプログラムに対する園の見解などについて回答を求めた。91園からの回答を分析した結果、①預かり保育を実施している園の割合は64%(58園)、②子育て相談は53%(48園)、③就園前の親子への支援は75%(68園)と、それぞれ半数以上の園で実施されていた。また、丹羽・安藤・岩藤・立石・荒牧・砂上・堀越・無藤(2006)では、61幼稚園の園長を対象に、平成17(2005)年にも同内容の調査を実施したところ、29園からの回答があり、①預かり保育を実施している園の割合は79%(22園)、②子育て相談は86%(25園)、③就園前の親子への支援は68%(19園)となっていた。

未だ幼稚園での実施率が高いとは言えず、また多くの課題を抱えながらも、その拡充が待たれる就園前の親子への支援であるが、昨今、特定の実施園を対象に、取り組みを詳細に紹介しながらその意義を追究する研究が登場してきている。川喜田・金田・霜出・大浦(2008)は、白梅学園大学附属白梅幼稚園で実施された未就園児(3歳未満児)を持つ親子の支援活動「ひよこの会」(週1回実施・テーマ活動と園庭開放を隔週で設定)に参加した保護者を対象にアンケート調査を実施した。質問項目は、参加理由、子どもの喜んだ遊び、参加してよかったことなどであった。川喜田ら(2008)は、特に「遊びを介した親の意識の変化」に着目し、「ひよこの会」での経験を通して、「親も遊びを覚え」、「親が遊び方を学んで」いき、「親が子どもと遊びを楽しめる」ように親の意識が変化したと述べている。

また、田中・戸田・横川(2011)は、大阪府N市の私立Y幼稚園で行われている子育て支援プログラム(「輪になってあそぼう」は約3か月に1回実施・「サタデースクール」は1か月に1回実施)を研究の対象とした。プログラム開始当初に、参加保護者を対象に実施した質問紙調査項目は、1)親子の現状、2)活動での保護者の参加状態、3)活動での子どもの参加状態、4)活動に関する保護者の意識、5)継続参加に対する意識と変化、6)変化の般化であった。分析の結果、保護者の多くは子育て支援プ

ログラムを、子どものためには普段できないような遊びができる場所として、自分のためには仲間作りの場としてとらえていた。

以上のように、幼稚園における就園前の親子への支援に関する実践研究は、徐々に蓄積されつつある。しかし、その多くは、特定の一園における実践を対象としている。また、支援活動の開始初期と数か月後に同一の質問紙調査を実施し、保護者の意識の推移を追跡した研究は見当たらない。川喜田ら(2008)では、1年間に5月、10月、3月と3回のアンケート調査を実施しているが、調査対象者が同一ではなく、また親と子どもの遊びに対する姿勢の変化に主眼が置かれている。幼稚園における子育て支援とは、「保護者同士や地域のネットワーク」(堀越・安藤・荒牧・丹羽・岩藤・無藤, 2008)の形成の促進も担っており、プログラムに参加した保護者が、やがて、自ら子育ての主体になり、更には地域の再生にどう主体的に動いていけるようになっていくか(川喜田ら, 2008)についても視野に入れていくことを求められている。つまり、子育て支援を提供する側は、就園前の親子への支援に参加した保護者同士の出会いや関係性の構築について、ある程度把握しておく必要があるということである。

そこで、本研究では、就園前の親子への支援を展開している複数の幼稚園に着目し、その活動に継続して参加している保護者を対象に、未就園児支援参加当初(5,6月期)及び約半年後(11月期)に質問紙調査を実施する。そして、就園前の親子への支援を通して、保護者の子育てに対する意識がどのように推移するのかについて、他の参加保護者との関係形成にも焦点を当てながら分析、考察する。

方 法

調査実施時期 平成22(2010)年5,6月及び同年11月であった。

調査対象者 三重県T市立K幼稚園, M幼稚園, S幼稚園において実施されている就園前の親子を対象とする支援(以下、未就園児支援と表記)に参加した保護者であった。

調査実施方法 5,6月期は、K幼稚園及びM幼稚園では、未就園児支援の活動終了後にその場で調査票を配付し、記入後に回収した。記入できなかった調査票は、次回参加時に回収した。S幼稚園では、未就園児支援の受付時に調査票を配布し、次回参加時に記入後の調査票を持参

している場合に限り回収した。11月期は、3園とも未就園児支援の受付時に調査票を配布し、次回参加時に記入後の調査票を持参している場合に限り回収した。5、6月期の有効回答部数は54部（回収率92%）であった。5、6月期からの継続参加者に限定したところ、11月期の有効回答部数は32部（回収率74%）であった。

調査項目 フェイスシートでは、回答者の性別、年齢、家族構成、職業を尋ねた。次に、①子育てについて、②未就園児支援の活動について、③保護者同士の交流について、④自分にとっての未就園児支援について、選択もしくは記述により回答を求めた。2期とも同内容の調査票を配付した。なお、本論文では質問項目における活動名称を「未就園児支援」と記載しているが、実際に使用した調査票では各幼稚園の活動名称を記載した。具体的な活動名称は、K幼稚園は「たんぽぽ会」、M幼稚園は「うさぎ組・クラブ」、S幼稚園は「ぴょんちゃんクラブ」であった。

未就園児支援の概要 以下、K幼稚園、M幼稚園、S幼稚園の実践の概要をまとめて記述する。3園とも、0～4歳の未就園の子どもとその保護者を対象に、月に2～3回、特定の曜日に実施している。運営メンバーは、園長、保護者ボランティア、学生ボランティアである。約10名の保護者ボランティア（活動内での呼称：お母さん先生）がいるが、毎回全員が参加するわけではなく、各回5名前後が参加している。学生ボランティアは約3名ずつ固定して配置されており、基本的に毎回全員が参加し、活動の企画、運営を担当している。概して、午前9時30分から登園及び自由な活動の時間（外遊び、ままごと、大型積み木、ブロック、お絵描き、粘土、製作など）、午前10時30分から全体の活動の時間（手遊び、歌、ふれあい遊び、リズム遊び、絵本・紙芝居の読み聞かせなど）、午前11時30分に降園というスケジュールで運営されている。

結 果

(1) 保護者及び子どもの基本的属性

未就園児支援に参加した保護者の「性別」は、2期とも全員女性であった。「年齢」は、5、6月期では「35～39歳」が46%と最も多く、「30～34歳」28%、「25～29歳」11%と続いた。11月期も「35～39歳」56%、「30～34歳」28%、「25～29歳」9%と多い順に続き、30代の参加者が全体の7割を占めていた。「職業」は、5、6月期では「家事専業」が93%と最も多く、次いで「パート」4%、「自営」3%であった。11月期も「家事専業」84%、「パート」10%、「自営」6%であり、約9割が家事専業を選択していた。

未就園児支援に参加した子どもの「年齢」は、5、6月期では「2歳」が37%と最も多く、「3歳」30%、「1歳」23%と続いた。11月期は「2歳」38%、「3歳」38%、「4歳」18%と多い順に続き、いずれの時期も2歳と3歳で全体の7割を占めていた。

「家族形態」は、5、6月期では「核家族」が93%と最も多く、「3世代家族」2%、「その他」2%と続いた。11月期は全回答者が「核家族」を選択した。「子どもの人数」は、5、6月期では「2人」が50%と最も多く、「1人」39%、「3人」11%と続いた。11月期も「2人」60%、「1人」27%、「3人」13%と多い順に続いた。

(2) 子育てに対する保護者の意識について
「子育てが楽しいと感じるときは、どのようなときですか」（複数選択可）に対する回答選択率を図1に示す。調査実施時期と保護者の回答について、選択項目ごとにFisherの直接確率計算を行った結果、「自分の子育てのやり方が他のお母さんから認められたとき」において有意であった（ $p = .027$, 両側検定）。5、6月期（9名）よりも11月期（15名）において、本項目を選択する保護者が増えていた。一方で、「子育てが辛いと感じるときは、どのようなときですか」（複数選択可）に対する回答については、2期間にいずれの有意差も認められなかった。

(3) 未就園児支援の活動について

「現在、幼稚園での未就園児支援以外に、子育て支援活動（市町村が行っている子育て広場、

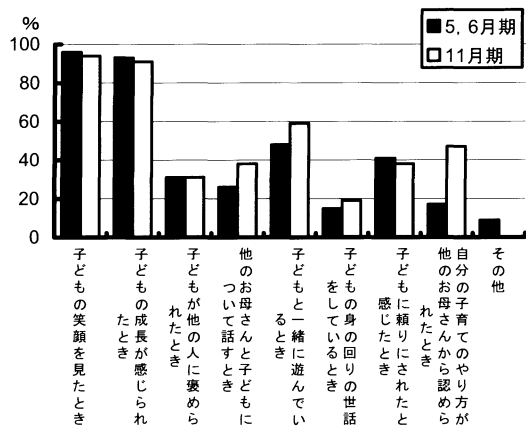


図1 子育てが楽しいと感じるときについての回答選択率

他の幼稚園の未就園児支援など)に参加していますか」への回答について人数差を検定した結果、有意であり ($p=.003$, 両側検定), 5, 6月期 (21名) よりも11月期 (3名) において, 他の子育て支援活動に参加する保護者が減少していた。次に, 「なぜ, 未就園児支援に参加しようと思いましたか」(複数選択可) への回答については, 「子どもと一緒に自分自身も成長できると思ったから」において有意傾向が認められ ($p=.072$, 両側検定), 5, 6月期 (3名) よりも11月期 (6名) において選択者が増えていた (図2)。更に, 活動への参加を楽しみにしている保護者 (5, 6月期47名, 11月期30名) を対象とした質問「未就園児支援に参加する時に, ご自身はどのようなことを楽しみにしていますか」(複数選択可) への回答については, 「保護者ボランティアとの会話」(5, 6月期16名, 11月期2名) ($p=.006$, 両側検定) において有

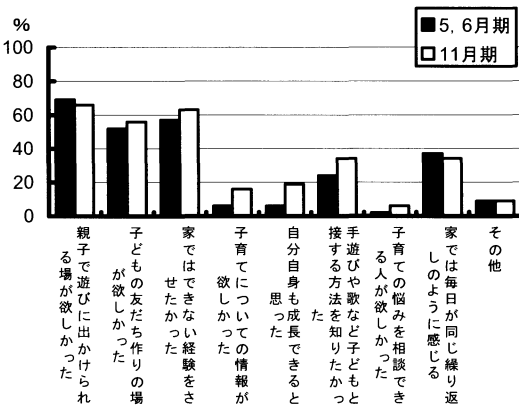


図2 未就園児支援の参加理由についての回答選択率

意であり, 「幼稚園の先生との会話」(5, 6月期13名, 11月期3名) ($p=.085$, 両側検定) において有意傾向が認められ, いずれも11月期の選択者が減少していた (図3)。また, 未就園児支援での経験を家庭でも実践したいと考えている保護者 (5, 6月期45名, 11月期31名) を対象とした質問「未就園児支援での経験で, 家庭で実践したいと思うものは何ですか」(複数選択可) への回答については, 「歌」(5, 6月期34名, 11月期29名) ($p=.062$, 両側検定) 及び「親子のふれあい遊び」(5, 6月期13名, 11月期15名) ($p=.096$, 両側検定) に有意傾向があり, いずれも11月期の選択者が増加していた。一方で, 「保護者ボランティアの子どもとの接し方や言葉がけ」(5, 6月期7名, 11月期1名) ($p=.074$, 両側検定) については, 11月期の選択者が減少する傾向にあった (図4)。

(4) 保護者同士の関係構築について

未就園児支援に参加している保護者と活動の中で付き合う場合に良いと感じることがある保護者は, 5, 6月期は69% (37/54名), 11月期は78% (25/32名) であり, 有意な偏りはみられなかった。良いと感じることがある保護者を対象とした質問「未就園児支援に参加しているお母さんと, 未就園児支援の活動の中で付き合う場合に, 良いと感じるのはなぜでしょうか」(複数選択可) への回答については, 2期間に有意差は認められなかった (図5)。一方で, 他のお母さんと活動の中で付き合う場合に困難を感じることを感じる保護者は, 5, 6月期は3名, 11月期は2名であった。その理由の内訳(複数選択可) は, 5, 6月期は「何を話していいかわからない」(3名), 「子ども同士のトラ

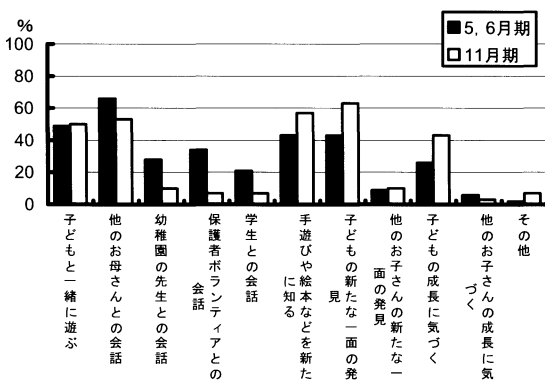


図3 未就園児支援において楽しみにしていることについての回答選択率

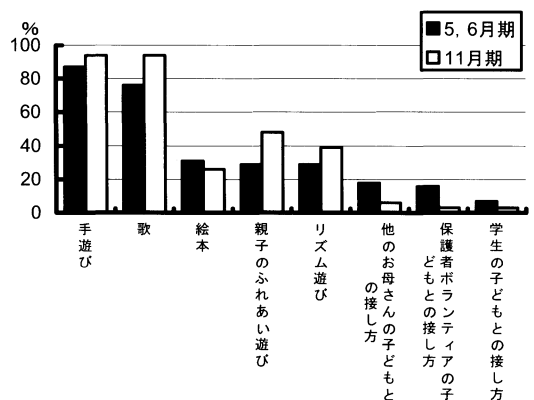


図4 家庭で実践したいことについての回答選択率

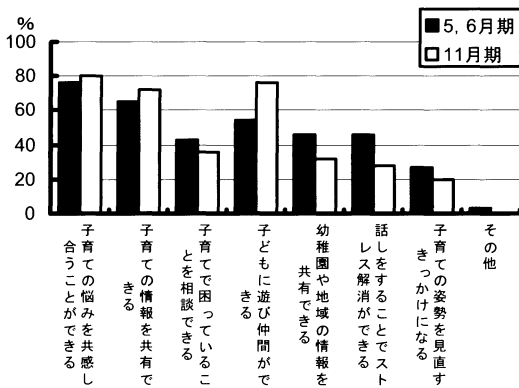


図5 活動の中で付き合うときに良いと感じる理由についての回答選択率

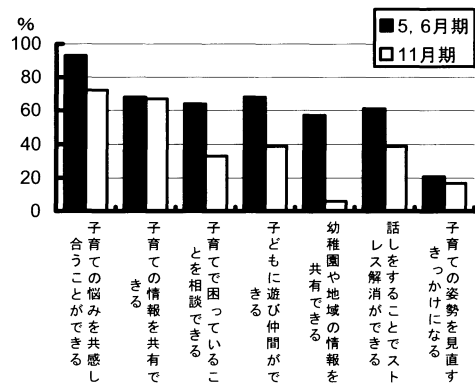


図6 活動以外で付き合うときに良いと感じる理由についての回答選択率

ブルで気まづくなる」(3名)、「必要以上に緊張したり、身構えたりしてしまう」(1名)、「グループができていて話しの輪に入りにくい」(1名)であり、11月期は「何を話していいかわからない」「子育てについての考え方が違う」「子ども同士のトラブルで気まづくなる」が各1名であった。

未就園児支援に参加している保護者と活動以外の場で付き合う場合に良いと感じることがある保護者は、5, 6月期は52% (28/54名)、11月期は56% (18/32名)であり、有意な偏りはみられなかった。良いと感じることがある保護者を対象とした質問「未就園児支援に参加しているお母さんと、未就園児支援以外の場で付き合う場合に、良いと感じるのはなぜでしょうか」(複数選択可)への回答については、「幼稚園の情報や地域の情報を共有できる」(5, 6月期16名、11月期1名) ($p=.000$, 両側検定)において有意であり、「子育てに関する悩みを共感し合うことができる」(5, 6月期26名、11月期13名) ($p=.093$, 両側検定)、「子育てで困っていることなどを相談できる」(5, 6月期18名、11月期6名) ($p=.069$, 両側検定)、「子どもに遊び仲間ができる」(5, 6月期19名、11月期7名) ($p=.072$, 両側検定)において有意傾向が認められ、いずれも11月期の選択者が減少していた(図6)。活動以外の場で付き合う場合に困難を感じることを感じる保護者は、5, 6月期は2名、11月期は1名であった。その理由の内訳(複数選択可)は、5, 6月期は「必要以上に緊張したり、身構えたりしてしまう」(2名)、「何を話していいかわからない」「子ども同士のトラブルで気まづくなる」「グループができてい

て話しの輪に入りにくい」が各1名であり、11月期は「子育てについての考え方が違う」が1名であった。

(5) 保護者にとっての未就園児支援について

質問項目「ご自身にとって、未就園児支援はどのような存在でしょうか」に対する自由記述回答を表1にまとめた。

考 察

まず、保護者自身の意識の変化について述べる。

未就園児支援への参加理由としては、期を通じて、親子で遊べる場の確保、子どもの友だち作り、多様な経験の場の確保が、比較的多く選択されていた(図2)。その傾向は表1においても確認される。また、参加理由として、11月期により多く選択される傾向にあったのは「子どもと一緒に自分自身も成長できるといったから」であった。また、「自分の子育てのやり方が他のお母さんから認められたとき」に子育てが楽しいと感じる保護者が11月期において増加していた(図1)。その一方で、「保護者ボランティアとの会話」や「幼稚園の先生との会話」を楽しみに参加する保護者は減少していた(図3)。活動内容については、11月期において、「歌」や「親子のふれあい遊び」を家庭でも実践したいと考える保護者が増加する傾向にあった(図4)。

以上から、保護者は、親子が集い、安全にそして安心して遊べる場所を求めて幼稚園の未就園児支援に参加しているといえよう。そして、子どもが他の子どもとふれ合い、対人関係を学ぶ貴重な場所としても評価しているようだ。その傾向は2期を通じて変わらないといえよう。しかし、活動開始当初に比して半年を過ぎる頃

表1 保護者にとっての未就園児支援についての自由記述回答（抜粋）

5, 6 月期
<ul style="list-style-type: none"> ・色々な経験ができ、また公園などがあまり無い中で遊べる場としてもすごくありがたいです。 ・普段家で過ごすことが多いので、外に出るきっかけ。子どもを自由に遊ばせられる。 ・家で遊んでいてもマンネリしてくるし、未就園児支援は親子で楽しく時間が過ごせる。園庭でも遊べるのは本当に良いと思います。 ・入園前に園を体験できる場所。 ・同じ年代の子どもと触れ合って遊ぶ機会があまり無いので嬉しいです。 ・子ども同士が成長しあう場。 ・子どもにとって他の子どもを見ることはとても刺激になります。 ・子どもが新しい経験をすることができ、対人関係も作っていきける存在。 ・親ではさせてあげられないことを経験できる場。もっと回数が多いとさらに嬉しいです。 ・家では見られない子どもの姿を見られて成長を感じられます。ダンスや手遊び、楽しそうにしているとうさぎクラブに来ていて良かったと思います。 ・子どもにとっても大人にとっても友だちができ、気分転換になる。 ・先生や他のお母さん方と話ができるし、子どもがのびのびと遊べるのでとても楽しいです。 ・同じように子育てしている人といろんな話ができるので楽しい。 ・元気で優しい先生やお母さんボランティアの方の子どもや自分への交流が参考になる。 ・学生さんがいると、身近で子どもも喜ぶ。 ・地域のひととの交流。同世代の人と話せる場。大人も子どもも。ずっと続けてほしい。 ・子どものためというより今は自分自身のため。引越してきたばかりで、初めての子育てなので、顔見知りを作る。子育てのことを相談する。子どもがたくさんいる幼稚園の雰囲気を感じるなどなど、楽しみながら通っています。 ・家から近く、気軽に母子ともに楽しく参加できる場。 ・ストレス解消、気分転換。
11 月期
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもを安心して遊ばせられるので大切な場所です。週1あればもっと助かります。 ・子どもがのびのびと同世代と遊べる良い環境を提供してくれる、良い会だと思えます。 ・今まで同じ年代の子どもと接することが少なかったため、子どもにとっていい刺激になっています。すごくありがたいです。 ・入園する際に、少しでも抵抗なく園生活になじめるためのステップアップの場所です。 ・幼稚園はどのような場か、集団とはどういうものかと、家庭では気づけないことを知れる場。 ・同世代の子どもを入園前に知ることができて、私にも子どもにもいいことだと思います。園庭で遊べるのも嬉しいです。 ・子どもの新たな一面を発見できる。親子ともに気分転換できる。子どもの成長の場。 ・大学のお姉さんと園長先生が元気に歌って踊ってくださるので子どもがとても喜んでます。その笑顔が見たくて、少し遠いですが自転車で頑張ってきています。 ・先生とは違う学生さんとのふれあい、子どもを成長させる場所。 ・絵本や紙芝居のように子どもを集中させて興味を持たせるものを少し増やしてもいいように思います。家ではあまりふれることのない紙芝居も楽しみにしているようです。 ・知らない方と話をするのははじめ勇気がいりますが、話してみると皆さん気さくに話ができるのでこれからもいろいろ話ができたらいいなと思います。親子共々成長の場になればいいなと思っています。 ・子どものためにも自分にもすごく良い場所です。 ・先生やボランティアさんの話が聞けて嬉しいです。 ・子ども、私にとっていつもと違う空気に触れ、気分転換と刺激を与えてくれる存在です。 ・近所の人と知り合いになる場所。 ・お母さん同士の情報交換の場。 ・身近で気軽に楽しめる場所。

になると、自分の子育てが他の保護者に認められることに喜びを見出す保護者が増加していることは大変興味深い。11月期には、保護者ボランティアや幼稚園教諭との会話を楽しみに参加する保護者は減少しているが、他の保護者との会話への期待は変わらず維持されていることから、活動開始当初は、慣れない場に参加して不安を抱いているであろう保護者ひとり一人に丁寧接し、また保護者同士をつなぐ役割を果

たす保護者ボランティアや幼稚園教諭との会話がより必要とされているが、半年後には、必ずしもそうした仲介役がいなくとも、保護者同士で会話を楽しみ、互いの育児について語り合う参加者の様子がうかがえる。また、11月期には、自分自身の成長のために活動に参加する保護者が増えており、手遊びはもとより、歌や親子のふれあい遊びなどに対してもより意欲的な姿勢で臨んでいることも見逃せない。田中ら(2011)

は、保護者は、子育て支援プログラムに継続的に参加することは「子どものため」と思っているが、継続することで「自分自身のため」にもなっていることを認識していると報告している。本研究においても、未就園児支援の場で得られた精神的安定を基盤に、保護者自身が自らの育児にいくらかの自信を持つようになり、自分自身の成長も楽しみにしながら育児に積極的に向き合うようになっていったことが推測される。ただ、以上のような変容が認められたのは、未就園児支援に継続して参加した保護者においてであり、且つその多くは、11月期には特定の幼稚園での未就園児支援にのみ参加するようになっていたことは注目に値する。概して、子育て支援活動は、実施機関ごとに開催曜日が異なることが多く、日替わりで種々の機関を転々と巡る親子の姿が認められることがあるが、本調査の結果は、特定の未就園児支援に継続して参加し、そこで丁寧につながりを形成し維持していくことの意味を暗示しているといえよう。

次に、保護者同士の関係性の変化について述べる。

未就園児支援の場での保護者同士の付き合いに関しては、5、6月期は7割の保護者が、11月期は8割の保護者が良いことがあると感じていた。2期を通じて「子育てに関する悩みを共感し合うことができる」ことが高く評価されていた(図5)。活動中での保護者同士の付き合いにおいて、大きな変容は認められなかった。未就園児支援以外の場での保護者同士の付き合いに関しては、5、6月期は5割の保護者が、11月期は6割の保護者が良いことがあると感じていた。しかし、具体的な理由に関しては、11月期の選択率が下がっている項目が目立った(図6)。また、未就園児支援の場及び未就園児支援以外の場での保護者との付き合いにおいて、困難を感じている保護者は極めて少なかった。本研究においては、未就園児支援に参加した保護者は、他の保護者と比較的良好な関係を保つことができていた。一方で、保護者との付き合いに困難を感じる保護者も存在し、そうした保護者に対する支援者側の役割も今一度確認しなければならないであろう。

未就園児支援の活動内における保護者同士のつながりは、半年を経る間に大きく変容するといったことはなく、ある程度のところで維持されていた。また、未就園児支援の活動外における保護者同士のつながりについては、半年を経

ての深まりや広がりには確認されず、関係構築の困難さがより浮き彫りにされたといえよう。未就園児支援が「保護者同士や地域のネットワーク」(掘越ら, 2008)の形成の促進も担うと想定されたが、本研究においてはその事実は確認されず、未就園児支援の活動中に培われた関係性を基盤に、保護者同士が未就園児支援以外の場においてもつながっていくことは、少なくとも半年という期間では困難であったようである。しかし、5割から6割の保護者が、未就園児支援以外の場でも良好な関係を維持していることも明らかとなった。今後は、その関係の詳細を探っていく必要があるであろう。

本研究の結果から、川喜田ら(2008)が指摘する「自ら子育ての主体に」なっていく保護者の姿を一部認めることはできたが、その後の「地域の再生にどう主体的に動いていくのか」といった点に関しては、追跡し明らかにすることができなかった。しかし、未就園児支援に参加していた保護者が、自身の子どもの就園を機に、新たに保護者ボランティアとして未就園児支援活動に参加するようになるケースをよく見聞きする。未就園児支援活動そのものも「地域の再生」を担っていると考えられるならば、未就園児支援の参加者から支援者へという保護者の変容を、地域の再生を担う主体的な貢献者への変容と見なすこともできるかもしれない。今後、以上の視点も踏まえながら適切な調査方法を設定し、半年や1年ではなく数年以上のスパンを設けて、保護者の変容を丁寧に追究する必要があるといえよう。また、本研究における11月期の調査票の回収率の低さも課題である。活動の受付時に調査票を配布し、次回参加時に回収するという方法は再考を要する。更に、2期とも無記名のまま調査票を回収したため、5、6月期と11月期の回答者の照合ができず、完全に一致させることができなかった。2期の回答者の照合ができれば、より実態を反映した分析と考察を提供することができたであろう。以上の課題を克服しながら、生涯発達心理学的な視点に立った(宮本・藤崎, 2011)未就園児支援の現場を記述、考察していく研究が待たれる。

引用文献

- 掘越紀香・安藤智子・荒牧美佐子・丹羽さかの・岩藤裕美・無藤隆 2008 子育て支援における幼稚園の役割：預かり保育と未就園児支援に関する園長インタビューから 大分

- 大学教育福祉科学部研究紀要, **30**, 143-155.
- 川喜田昌代・金田利子・霜出博子・大浦陽子
2008 幼稚園における未就園児をもつ親子のためのワークショップ：遊びを介した親子関係の発展をめざした幼稚園の子育て支援の取り組みから 白梅学園大学・短期大学紀要, **44**, 47-62.
- 厚生労働省 2008 保育所保育指針：平成20年告示 フレーベル館
- 宮本知子・藤崎春代 2011 我が国の保育所・幼稚園における子育て支援の実践および実践研究の動向 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **13**, 127-133.
- 文部科学省 2008 幼稚園教育要領：平成20年告示 フレーベル館
- 丹羽さかの・安藤智子・岩藤裕美・立石陽子・荒牧美佐子・砂上史子・掘越紀香・無藤隆
2006 幼稚園における子育て支援の実態調査(2)(2005年調査)お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, **3**, 17-29.
- 田中文昭・戸田有一・横川和章 2011 子どもの縦のつながりが紡ぐ未就園児保護者への発達展望支援：幼稚園での子育て支援実践

参加者の声からの考察 学校教育学研究, **23**, 63-70.

- 立石陽子・安藤智子・岩藤裕美・丹羽さかの・金丸智美・荒牧美佐子・掘越紀香・砂上史子・無藤隆 2004幼稚園における子育て支援の実態調査 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, **2**, 27-37.

謝 辞

本調査にご協力いただきました幼稚園教職員の皆さま、保護者ボランティアの皆さま、参加保護者の皆さまと子どもたち、そして学生スタッフの皆さんに深謝申し上げます。教員養成学部の地域連携活動の一環として始められた未就園児支援活動は、大変貴重な学びの機会でありました。このささやかなつながりが、今後より力強く根を張っていきますよう祈っております。

付 記

本研究は、平成22年度三重大学教育学部卒業研究「公立幼稚園の未就園児保育に参加する保護者の意識」(吉村淳美)について、活動に参加した保護者の意識の推移により焦点を当て、滝口が改めて分析、考察したものである。